6月23日　慰霊の日　特集

戦跡を歩く8

今年は、沖縄戦終結から69回目の夏を迎えます。沖縄戦終焉の地糸満市には、多くの慰霊塔・碑などがあり、今でも当時の記憶を伝えています。シリーズ8回目の今回、山巓毛の「防空監視哨」にまつわる記憶を、当時監視哨員として勤務した金城光栄さんの体験談からたどります。

元糸満監視哨員の皆さん。後列右から2人目が金城さん、その右隣りが副哨長だった島袋さん(後に哨長)。1953年6月23日、喜屋武岬にて撮影

必死に鳴らしたサイレン
金城 光栄さんの体験談

○監視哨員に採用

昭和18年3月に国民学校高等科を卒業。先に監視哨員になった先輩の島袋良徳さんに誘われて、卒業3日後に監視哨員となった。どうせ徴用に取られることだし、監視哨の経験は軍隊に入っても役に立つと考えてのことだった。

辞令は糸満署警防係から県知事名でもらった。給料は代用教員が18円の時に20円だった。交代で立哨と通信の勤務があり、哨舎から東西に一人ずつ、互いに反対方向を監視した。精巧な飛行機の模型や軍が提供した写真を覚えて機種を判別した。上空を飛ぶ飛行機の仰角度や雲の種類を参考に飛行高度を計算することも覚えた。非番の時は、30センチくらいの敵飛行機の模型を100メートル先に置き、双眼鏡で見て判別する訓練もした。

○不明機発見

翌19年9月29日、南東の方角から聞きなれないかすかな音とともに飛行機雲を引いて北東へ消えた飛行機を発見。初めて見る機種で敵か味方か分からず「彼我不明」と通報した。那覇監視哨からは川西航空機の二式大艇じゃないかとのこと。4発プロペラの大型機は小一時間ほどして北東から再び現れて南東へ消えた。後で分かったが、糸満監視哨だけが発見したこの航空機はB29だった。このころから哨舎に草や木の枝を刺した擬装網を被せるようになった。

○10・10空襲

当日は当番の交代前だったが、6時45分ごろ、立哨から爆音が聞こえると言われ双眼鏡で見ると、南東の方角の上空を光を背に多数の敵機を発見。すぐに「敵機数不明、大編隊」と報告した。

糸満署では「今日の訓練はすごいな」と警防主任でさえも話していたとのことだが、哨舎では鉄兜を被って空襲警報を鳴らす準備をしていた。空襲警報は、陸軍、海軍、県知事の発令許可が必要だが、いくら待っても許可がでないため自分の判断で手動サイレンを鳴らして住民に知らせた。しばらくして被害情報や爆煙もあり、空襲だと判明した。

糸満沖では停泊中の民間船「ダイトク丸」に4機編隊の米軍機が爆撃してきたが、1機目の落とした爆弾の爆発圏内に2機目が飛来。爆風を受け墜落した。日本軍が機体を引き上げて調べたが乗員は不明だった。

また、片翼に被害を受けて糸満上空をフラフラ飛ぶ敵機があったが、西側に旋回して慶良間との中間辺りに着水した。そこへ潜水艦が現れて乗員を救助していった。日本は特攻を仕掛けるのに米軍は潜水艦で救助するなど乗員の命を大切にしていた。

糸満署管内でも死傷者が数人出たほか、家屋の全壊全焼半壊半焼、船舶の沈没や破壊など多くの被害が出た。年明けの1月3日から3月23日までほぼ毎日のように米軍の偵察機の飛来や空爆があった。

○米軍上陸後

4月1日、米軍が沖縄本島に上陸した。監視哨員は、同日付けで沖縄県巡査に任命され糸満警察署勤務となった。糸満派遣隊として新島区にあった警察署壕で避難民誘導や通信などの任務に就いた。

戦況が悪化し、6月初旬に新島から8人1組で南へ撤退した。途中立ち寄った轟壕で数日ぶりに水を浴びた。6月12日ごろに喜屋武岬に着き、崖下へ降りて岩の割れ目に隠れていた。水は離れた所にしかなく水汲みは危険なため、米兵が捨てた空き缶に海水を入れて隠し持っていた米粒を炊いた。一口目はどうにか食べたが、二口目からは食えたものではなかった。焼け残った畑からキビを拾って食べたがこれもまずかった。

海からは掃海艇、地上からは小銃で狙われ「デテコーイ」と何度も呼び掛けられた。身を潜めていた岩付近へ砲弾を打ち込まれ、崩落した岩で右足を負傷した。付近では重傷となった人や命を落とした人もいた。そんな中、警察本部警部の「後方撹乱のために出るぞ」の言葉に従い米軍に投降した。

金城（きんじょう） 光栄（こうえい）さん

1928（昭和3）年生まれ。字糸満出身。高等科卒業と同時に監視哨員として勤務。米軍上陸後は糸満署勤務の巡査として避難民の誘導や伝令などの任務に就く。あぜに寝転ぶように倒れていた親子や負傷兵の自決に巻き込まれて死んでしまった男性など、避難中に目にした惨状は今も忘れることができない。

山巓毛の防空監視哨跡。右奥にあるのが国旗掲揚台と御大典記念碑

【防空監視哨跡】

防空監視とは、上空を飛来する航空機を速やかに発見して、敵・味方を識別し迅速かつ確実に防空機関に知らせるもので、警報発令など防空上の判断の基礎となった。

1941（昭和16）年末の「防空監視隊令」により防空監視哨は常備体制となり、組織ならびに設備の整備と強化が図られた。県内11カ所に防空監視哨が設置され、そのうちの一つが山巓毛頂上に設置された糸満監視哨であった。哨長・岡本恵清さん、副哨長・島袋良徳さんの下に、18人の哨員がいた。

哨舎は八角形のコンクリート造りの小さな建物で、中に監視隊本部との直通電話機があり、緊急時などにはこの電話で連絡を取った。また、敵の目をごまかし発見されにくいように、哨舎には建物の上から偽装網が掛けられていた。

防空監視は、18人の哨員が3班に分かれ24時間勤務の3交替制で、当番の6人は2人が立哨、2人が通信、2人が休憩と2時間ずつ交代しながら任務に当たったという。哨舎の北東側の少し下った所には、瓦ぶきの哨員用の宿舎があった。

これらの施設は沖縄戦で破壊され、現在は哨舎の土台のみが残っている。その近くには砲撃の跡のある国旗掲揚台、標的にされないよう台座から切り離された御大典記念碑などが今も残されている。

過去のシリーズは、ホームページでご覧になれます。沖縄戦における糸満市の情報は、「糸満市史 資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」で詳しく紹介しています。
問い合わせ　生涯学習課☎840・8163